

日本漢文の授業づくり～戦前の実践の積み重ねを活用する～

2022年5月29日(日)
 全国漢文教育学会第37回大会
 十文字高等学校 山之内英明

I. 直近の実践例 『史記』と安井息軒「題蘭相如奉璧図」との読み比べ

[科目] 古典B(4単位)

- 古文：週3時間・漢文：週1時間に分けて授業を実施しており、当該クラスの1学期中間試験までの漢文の授業数は5時間(現代文からの振替1時間を含む)。
- 十文字高等学校では1授業時は45分で、週37時間の授業を行っている。

[対象] 6年菊組 27名

- 文型(私立・国公立志望混合)の選抜クラス。全員が大学進学を目指しており、漢文への意欲も高い。

[使用教材]

(1) 『史記』「完璧帰趙」(三省堂『高等学校 古典B 漢文編 [改訂版]』、古B334、P.128～P.131)

(2) 安井息軒「題蘭相如奉璧図」(自作プリント)

→発表資料1・2参照(生徒には資料1の他に白文と罫紙を上下に印刷した書き下しプリントも配布)

(3) 尚文出版『必携新明説漢文』(副教材)

→本時は詠嘆形・抑揚形・限定形について言及し、中間試験の出題対象であることを注意喚起する。

[評価]

- 1、知識・技能：定期試験で評価
- 2、思考力・判断力・表現力：定期試験およびワークシートで評価
- 3、主体的に学習に取り組む態度：書き下し文の提出状況および授業中の観察で評価

[指導計画] (全5時間の単元の5時間目) 2022年5月24日(火) 7時間目に実施予定

時数	学習内容	指導上の留意点
1～4	『史記』「完璧帰趙」(教科書教材)	紙面の都合で省略
5	安井息軒「題蘭相如奉璧図」 ・授業中に学んだ情報のうち字義・語彙に関する内容はワークシートに、それ以外の情報は各自のノートやプリントに整理して記録する。 ・安井息軒の解釈では、蘭相如の何が秦王の璧を奪おうという狙いを断念させたのか、句形ではなく語彙に注目して考察し、その結果をワークシートに記入する。	・ワークシートを配布し、本時の授業の概要とねらいが蘭相如の逸話に対する安井息軒の解釈を学ぶことであることを説明する。 ・息軒の文章を範読して解説する。本来は指名読み等も行いたい、本時は最後に考察の時間を設けるため、手早く解説を重ねる。 ・息軒は蘭相如の何が秦王を圧倒したと考えているか、本文中からワークシートに語句を抜き出させる。回収時に授業者の想定した答え「浩氣」(及び「義」)を口頭で伝える。
中間試験		
6	・中間試験返却 ・『孟子』「公孫丑上」(プリント教材)	試験返却の後、「浩氣」について、筆者がこの語を使い際の拠り所とした『孟子』を読み、語彙の理解を深める。

- 授業で扱う文章については、すべて事前に書き下し文を提出させ、授業担当者が添削して返却済み。

[ワークシート]

六年菊組 番氏名		行	
		字・語句	
		意味	

安井息軒「題蘭相如奉壁図」

「ワークシート」

問い「題蘭相如奉壁図」の筆者安井息軒は、蘭相如が壁を秦に渡さずに趙に帰還できた理由は何にあると考えているか。本文中の語句を抜き出して一語で答えなさい。

ワークシート

フートン 今日の授業で学んだ内容のうち、漢字や語句の意味に関するものを選んで、左の欄に記しなさい。

II. 国立国会図書館デジタルコレクションの活用について

・今回の安井息軒「題蘭相如奉壁図」は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている範囲でも、『息軒遺文』巻三の他、『新輯漢文実業学校用教授備考巻四』（1939年東京開成館刊）にも収められている。

→現在で言う「指導書」を旧制の時代には「教授備考」と呼んでいたようだ。教科書そのものが手に入らなくても、語釈から掲載範囲は概ね推定できる。また、語釈そのものも参考になる。なお、旧制時代の漢文教材の検証については、機会を改めて取り組みたい。

・近世以前は多くの著作が漢文で書かれており、その蓄積は膨大で、個々の著作をまるごと読むのはなかなか難しい。大学院等で専攻した教員でなくても、日本漢文を活用した授業づくりを立案する際には、こうした戦前の実践の積み重ねをヒントにしてもよいのではないだろうか。旧制の学校教育の中では、漢文は皇民化教育の一翼を担った。従って、旧制時代の教材を再活用する場合には国粹主義に陥らないよう教材選定の際に留意しなければならない。その上で、例えば松崎謙堂が平泉を旅した紀行（芭蕉『おくのほそ道』との読み比べ）など、他の教材についても実践の機会を探って行きたい。